数学嫌いは、相変わらず

「数学嫌いな人のための数学（数学原論）」を読破。

数学は、幾何は得意であったが、微分、積分、確率からは、ちんぷんかんぷん。

書名に引かれ、「じゃあ、チャレンジするか！」と読んで見ると、数学の論理で、歴史、経済、果ては宗教にまで触れており、何と我が雑学精神にマッチ。でも、数学の論理の言葉での解説には、「ふ～ん、そうなの。ふ～ん、そうなの。」の字面をなぞるだけの連続。例えば、「必要条件、十分条件こそ、数学征服の鍵」とか、この違いを解る？「滑らかに使いこなせるようになっていないと、本当に理解したとは言えない」。ごもっとも。やはり僕は、一つの道を究める学問より、雑学でいい。

また、曰わく、「論理の極意は、相手が、内心で何を欲しているかを見抜き、相手が受け入れやすい形で伝えること。相手の言っていることを、コテンパンにやっつけて退路を断つことなど、もってのほか」。これには拍手。「相手の論理で、相手の理解できる言葉で、自分の言いたいことを言えるようになれ！」と、僕は日頃若者に話していることの裏付けを取れた気分、爽快なり！　よほど僕のように暇のある方は、ご一読を。

著者：小室直樹　　出版社：東洋経済新報社　　定価：1、600-＋税

（2002 年 01 月 20 日　記）